

してある神様は隣国朝鮮での戦いに敗れて、難を逃れてこられた禎嘉王の子、福智王だと伝えきいています。

その頃、宮田川の下流は古湊といって港になっていましたが、私が小さい頃には中鶴からも船の帆がいっぱい見えていました。

禎嘉王は、この古湊に船を泊められて上陸されました。その時は船も大分いたみ、帆などは海水でじっくり濡れていたのです。そこで濡れた船の帆を陸に引き上げ、広げて天日でかわかされたのです。それから後この付近のことを帆広げと呼ぶようになりましたが、現在では帆広げ・毛比呂計・茂広呂計などと呼んでいます。何か関連がありそうです。

ところで、この帆を広げて乾かした跡に神社を建てて福智王をお祀りしたのが毛比呂計神社といわれています。

この地にはこんなはなしものこっています。雲雀山のある男の人が、この付近（別図）に田を開き稲を作られたのですが、肝心の米は余りとれず、えらい「さすらい」（病気とか不幸なことにあうこと）をなすったそうです。

大変困られたその男の人は、これには何かわけがあるに

違いないと思い、ある信仰家に拜んでもらわれたそうですが、その方がいわれるには「その田んぼの地下には、昔、福智王が乗ってこられた船がいかって（埋もれて）いるからだ」と申されたのです。その男の人は大変びっくりして、早速その田んぼで稲を作ること止められたそうです。その後は「さすらい」こともなく、幸せな日々を送られたといえます。

又、その付近にはずっと昔から舟形になった田があり、誰も作っていないかったといえます。そして川沿いにある田んぼの真中に石塚があり、「べんけい」に「が沢山」這いまわって、この田も稲は作っても駄目だったとか。そして田んぼの周辺には「ガンツナギ」という牛も食べない草が一ぱい生えていたということです。

尚、現在、毛比呂計神社の祭礼のときは、中鶴地区の人々によって元屋敷の神社跡（記念碑が建てられています）を清めお神酒をお供えしてお祭りしたあとに、今の神社のお祭りが行われています。

又、元屋敷神社跡は、中鶴老人クラブの方々がいつもきれいに掃除され、お祀りされています。

すね神さん

中尾 岩切 久江

字老瀬坂の上の東の端に、足の痛みに靈驗あらたかな神様がおまつりしてあるというので、牛牧の古小路重雄さんに案内して

いただいております。

神社は青木地区中原の五十坂を

登りきったところから、北へ約

五〇〇米（老瀬坂上から東へ六

〇〇米）のところにあります。

おまいりした時は、境内がきれいに

掃除されて、お供えの榊、ローソク、お菓子な

どが上っていましたが、この神様には次のような

いい伝えが残されています。

ずっとずっと大昔のことです。西旧杵の

高千穂に住んでおられた神武天皇は、高鍋

地方によくお出でになりました。

ある時のこと天皇は、母君の須峯さまをお連れにな



って山王（羽根田）にお出かけになりました。ところが途中（すね神さんの

ある所）までお出でになった時、母君

の足が急に痛み出し、ついに一歩も前

に進むことができなくなりました。

天皇は大変お困りになりましたが、

当座の手当てをされて、母君をその場

に残して出かけられました。母君の須

峯さまは何とかして痛む足をなおそう

と、その場で懸命にお祈りをなさいま

した。ところが不思議なことに、あれ

ほど痛んでいた足がなおり歩けるよう

におられたのです。

母君の須峯さまは大変よろこびに

なられて、その場から引き返されたとい

うことです。

この話を聞いた村人たちは、その場

所にはきっと足の神様がいらっしゃる

のだという評判になり、粗末になって

はいけないと、お宮をお造りしておまつりしました。そして須彌原神社と命名しました。

そののち、村の人々はすね神さん、すね神さんと親しみあがめてきました。

その後すね神さまは、牛牧の人々を中心として、近郷近在の人々の信仰する神さまとして親しまれてきました。人々は足が痛み出すと、このすね神さんにおまいりしてお祈りしましたが、お祈りすると不思議にも痛みがとれるのです。

そうしたことが続いていくうちに、ますますすね神さまを信仰する人々が増えてきました。とくに町の方からもたくさんの方々がおまいりに見えていました。

今でも、毎月十二日になると、牛牧地区のお年寄りの方々がお供えものを持っておまいりされますし、近郷からもおまいりが絶えません。

やんぶし（山伏し）屋敷

中尾 岩切 久江

ずっと

昔の頃、高鍋の領主伊東氏が、農業が、振興のため牛牧に牧場を開いていました。牧場は、牛牧を中心唐木戸付近まで、大変に広いも



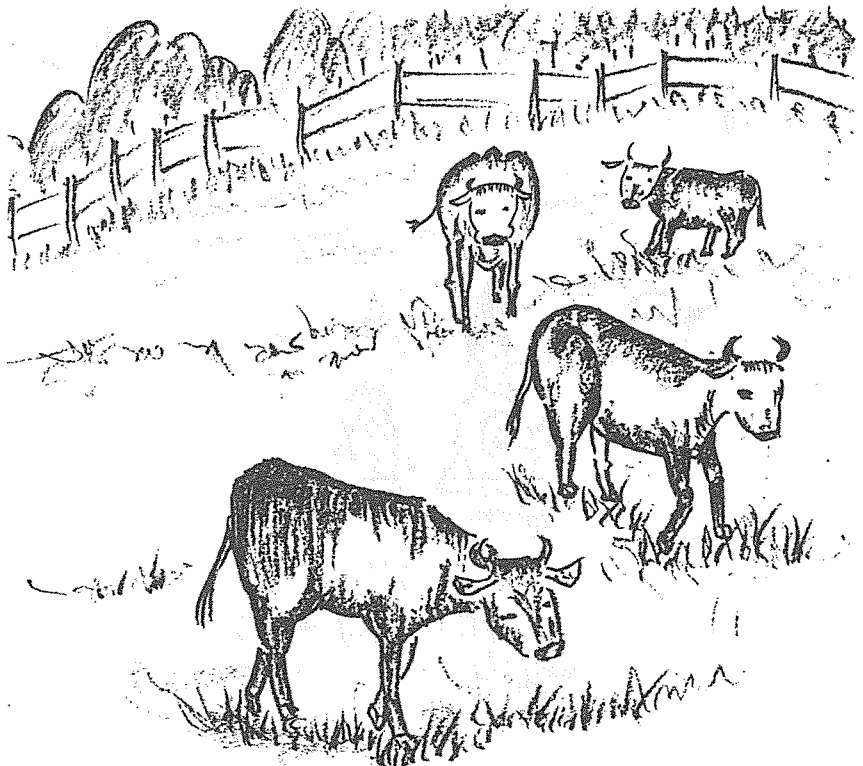
のでした。まわりは木を使って柵をつくりかこんでありました。

牧場には牛を放牧していましたが、今のような大きい牛でなく、姿・形が小さくかわいい牛で「やぶこぶり牛」といっていました。

牧場には数名のやんぶしがいて、道場をたてて住みこみ、修業のかたわら牛の世話をしていましたが、それが今も残っていてやんぶし屋敷の跡といわれています。

その頃、やんぶし達は、お昼近くになりますと外へ出て、首からつるした大きなほら貝を口にあて、ポーッ、ポーッ、ポーッと吹き鳴らすのです。広い牧場に散っていた牛はその音を耳にすると、あちらの山陰、こちらの森の中からぞろぞろとやんぶしの立っている寄せ場に集まってきます。集まって来た牛は用意された草をはみ、腹がふくれるとそれぞれ横になって反すうするのです。

やがてやんぶしは、又もやほら貝を吹き鳴らします。牛達はほら貝が鳴りはじめると次々に起き上がり、木戸（出入口）の方へ列をつくって進んでいきます。やんぶしが木戸口の柵を開きますと、集まってきた牛は待ってい



たように外に駆け出し、小道に沿って南の方をさして歩き出すのです。（この木戸のあった付近が唐木戸です）途中やんぶし達は、時々ほら貝を口にあて、ポーッ、ポーッ……と牛を追いたてながら進んでいくのです。や

がて着いたのは宮田川のはとりです。やんぶし達は牛に水を飲ませながらゆっくりと休そくを与えるのです。

小半時を過ぎる頃に、又もやほら貝を吹きはじめ帰る支度にとりかかります。牛はもときた道を、勝手に草をはみながら牧場をさしてもどっていきます。やんぶし達の吹くほら貝の音は、行きも帰りもまことにのどかで、近郷近在に鳴り響き、人々の心をなごめるのに十分でした。

こうしたことが毎日毎日繰り返されていましたが、いつのことからか、この付近一帯を牛牧というようになってしまいました。

種樹公の威徳

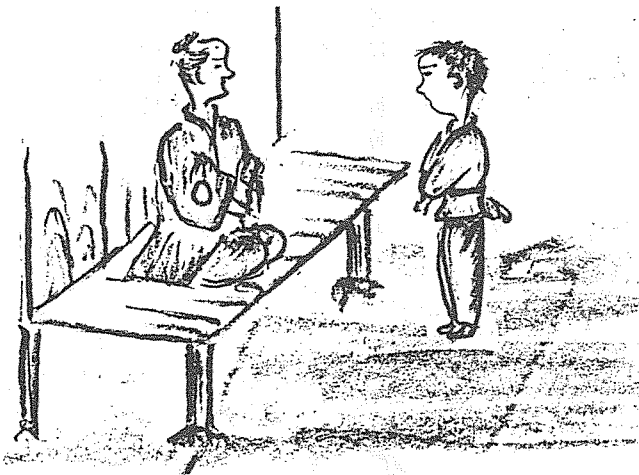
高鍋郷土教育資料集より

ある年の秋のことです。西臼杵郡高千穂の人がはるばる高鍋の黒木義一氏を訪ねてこられました。その人は何

か心配ごとがあると見えて、おそるおそる義一氏へお願いされました。

「貴方様のお家には、魔除けのお守りがあるそうでございますが、暫くの間お貸し下さることは出来ないでしょうか」

というのです。



義一氏は不思議なことを言う男だと思いいながらいいました。

「いや、そんな物はないが？　ありさえすれば貸して上げるどころではないが」

といいますと、その男は

「実は私の村の男が、いぬがめつきになりまして、

*いぬがめ——高鍋地方ではいんがめともいった。

犬神のことで、四国や東海地方にあった犬の霊を使うまじないの一種で、犬神をもっている人が誰かを憎むと、犬神がたちまちその人について、病気にしたり殺したりするという。

ご祈禱をしても駄目なのです。家族の者は勿論、近所の者も困り果てていましたところ、高鍋に黒木義一という方がおられてお守りを持っておられるから、それを借りて来てはどうだ、その方は大変親切な人だからきっと貸して下さるに違いないと教えてくれた人がいましたので、わざわざ借りに参った訳でございます。どうか何とか貸していただませんか」

と、七重の膝を八重に折って頼むのです。義一氏はし

ばらく考えていましたが、何か思い当たることでもあったのでしよう。

「よろしい。では、そのお守りを貰って来てあげましょう。今日は、まあ、ゆっくりして私の家にいなさい」

といい残して、早

速衣服を改めて御殿

へ行きました。義一

氏は御殿へ上がると

すぐに、種樹公にお

目にかかりました。

そして事の次第を細

かにお話した上で、

「お守」の二文字を紙

に書いて戴きました。

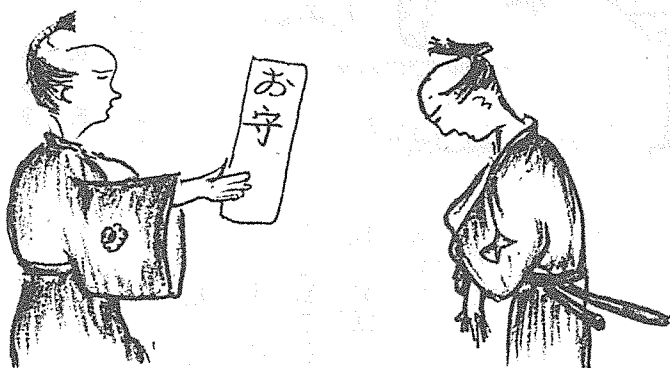
義一氏はニコニコし

ながら

「おかげ様で、人

人助けることができ

ます」



と、丁寧に敬礼を申し上げました。種樹公は

「そのくらいのことでは人が助かるなら、いくらでも書いてやるぞハハハハ……」

とお笑いになりました。

義一氏はそのお守りを厳重に包み、その上に「お守」と書いて戴くと、厚く敬礼をのべて我家へ帰りました。

高千穂の男は、早速願いがなかったのでおどろいて喜び、何ども何ども額を畳にすりつけながらお礼を言ってお帰途につきました。その頃はまだ馬車もなかったもので、どこへ行くにも膝栗毛（自分の脚を馬の代わりにすること）に鞭を当てる行かねばなりません。それで、高千穂の男は夜を日について道をいそぎました。

その後、十日余り経ったある日のことです。高千穂の男が再び義一氏の屋敷を訪れて、丁寧に敬礼の言葉を述べると共に、次のような話をいたしました。

私は戴きました「お守」をふところに、三日目の昼過ぎ漸く高千穂に帰り着きましたが、私が門に入ると今まで寝ていた病人が、突然に大声で

「ああ、苦しい、苦しくなった。誰か、今家の門から入

って来た者を追い出してくれ、早く、早く……。ああ、苦しい、苦しい」

と今にも死そうな声で叫ぶのです。

家族の者は余りにも突然なこの有様にびっくりしましたが、

何をいうかと誰もとり合わず、

そのままほっていましたとこ

ろ、またもや病人は、

「もうたまらん、苦しい――、

苦しい――。早く追い出して

くれねば……。もう、家の中

へ……入ってきたぞ。早く、

早く……。出してくれ――」

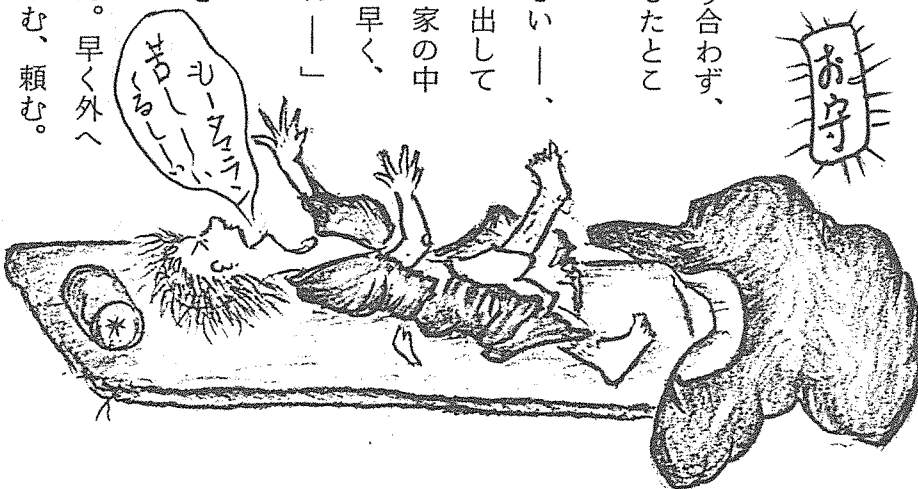
病人は、

「お前は、えらい物をも

ってきたな――」。

アア苦しくてたまらん。早く外へ

出ていってくれ、たのむ、頼む。



ア、ア—ッ。苦しい、苦しい」

と絶叫するのです。私はそこにいる人達への挨拶もそこそこに、懷にしていたお守りを急いで取り出し、病人の枕の下へ差し入れました。と、病人はガバと跳ね起きながら

「アアもう堪らん、苦しい、苦しい。もう帰る、帰るか
ら許してくれ、許してくれ」

といいながら、庭におどりでたかと思うとバツタリと倒れてしまいました。

これを見ていた者は、皆あっけにとられて成り行きを只呆然と見ていましたところ、やがて病人はむっくりと起き上がって、辺りをキョロキョロと見回して、何事もなかった様にヒョコヒョコと家の中へ上がってきたのです。まるで悪夢にでも襲われ、今、目が覚めた様な気持ちだったのでしょう。

こんな事があって、病人には病氣をしていたことも分らぬままに全快し、元の元気な若者になったのでございます。

と、話した上で厚くお礼を申し上げて、高千穂へ帰っ

ていったということです。

※ 黒木義一氏は水谷原の人で、昭和四年の夏、天寿を全うされています。

わらじの絵

西平原 安田 郁子 六十二歳

安田家は京都より高鍋藩の絵師として召しかかえられて来ました。初代の李仲は、有名な狩野尚信に師事していましたが、高鍋藩の要請で迎えられることになったとき、師の尚信に李仲という雅号を与えられました。それ以来、李仲を通り名としたということです。

さて、その後、安田家の当主は藩の絵師として仕えてきましたが、五代李仲は特に絵を描くことにすぐれていました。その逸話が次の様に残されています。

ある年のこと、秋月公が参勤交代の折、李仲もそのお供を仰せつかり殿様に従って江戸にのぼることになりました。そのころは高鍋から美々津まで徒歩でいき、美々津港からは千石船に乗り兵庫県の室津港で上陸し、その旅籠で一泊されて江戸へ出立される慣わしとなっていました。

ところが、当時、李仲の絵のすばらしさは街道筋では良く知られ、だれもがその絵を手に入れたいと思ってい

ました。それで旅籠の主人も機会があればとその時がくるのを待っていたのです。

丁度その折、李仲が殿様のお供でこの旅籠に見えるとということが耳に入ったのです。宿の主人は、いよいよ李仲様がお見えになる。なんとしてもお願いして描いてもらおうと、びょうぶ職人を呼びとびきり上等のびょうぶを作らせて待ち構えていました。

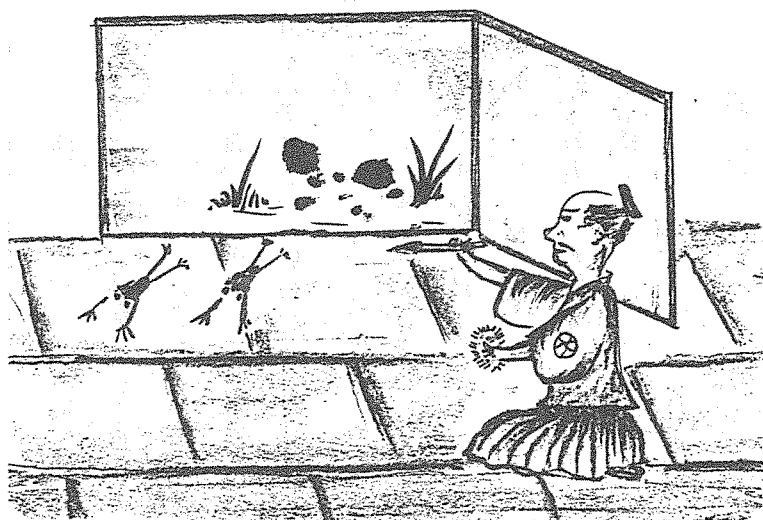
いよいよ殿様がお着きになり、李仲も宿へ着きました。宿の主人は一行がお着きになると、丁重にもてなすとともに、つかれもとれたころ李仲の所にお伺いしました。そして、びょうぶに絵をかいてくださるように頭を低くして懸命にたのみました。李仲は、ややしばらく考えていましたが、主人が余りにも熱心に頼みますので、その心に打たれ

「ではつたないですが、おひきうけいたしましょう」と承知しました。そして、ややしばらく考えていましたが、

「新しいわらじが一足ありますか」といいました。主人は少しいぶかしそうな顔をしまし

たが、いわれる通り準備をととのえました。

李仲は準備された用具をともにひきよせ、しばらくびょうぶをにらんでいましたが、やがて新しいわらじを



とりあげ両手にはめると、墨皿にどっぴりつけて、いきなりびょうぶのうえに思いきりべたべたと墨わらじで二か所ぬりつけました。わらじの跡形は、うつくしい白いびょうぶにぶざまにつけられ、おまけにわらじのしずくがポタポタと落ちて、全くだいなしです。

主人はこの様子を見て、少し怒ったような顔付きでいました。

「これは一体どうしたことですか、せっかくのびょうぶが台なしではありませんか」

と申しますが、李仲はその言葉も耳にいらなくいいました。

「うーむ、これでよからう」

といって主人をふりかえりましたが、主人は、ぼかーんとしてもうなきだしそうです。李仲はそれを見るとかわいそうになり、こふでを一本とりあげ、わらじの跡形とてんでんとおちた墨にちよっちょっとかき、雑草をスーッ、スーッとかきいれて

「これならわかるだろう」

といって筆を下におろしました。

と、その時です。ふすまの絵の中から数匹の蛙が勢よくピョン、ピョンと飛び出してきて、絵の中のくさむらに飛びこんでしまったのです。

主人をはじめ、これを見ていた者一同は、全くびくりしてしまいました。

はてな？ とびようぶをたててよく見ますと、どうしたことでしょう。落書きで汚したような墨あとは風雅な庭園を見るようで、まるで本物の庭を眺めているようにみえるではありませんか。尚、よくみると蛙のぬけでた跡が淡くかすかに残っています。

宿の主人は大変おどろいて、自分の絵心のないことを恥、李仲へあつくお礼をのべて、これをわが家の宝としたということです。

蚊口の「かき」とりの怪

蚊口 青木 フデ 九十六歳

私が延岡から高鍋に嫁にきたつは、明治の終わり頃じやった。汽車も通ちよらんかったもんで、延岡からずつと客馬車に乗ってきたじやった。

そんな頃蚊口ゆたら半農半漁じやったが、田畑もあんまりねかったし、大抵のもんが貧乏ぐらしじやったつよね。

それでわしどんは、ちっとでん暮らしを楽にしゅと思つて、浜に「かき」採りに行つたもんよ。浜にいくでん大きな松の木がいっぺ生えちよち屋でんくれし、おなごやこどもや、え通らんごつあつたつよね。

「かき」が一番あつたつは今ん高島亭の下ん方と、宮田川ん下ん方じやった。そりやーあぎょうさんおつたもんよ。「かき」採りが仕ごつで、何人かずつ連れだちいきよつた。

採つてきた「かき」や店で売つてもろたり、宮崎や妻へんまじ、歩いて売りにいきよつたもんじやったつよね。

今じゃ、浜にヤテトラポットが並んで、昔「かき」がおったところじゃあ、もうおらんごつなちしもた。

「かき」採りや潮ん関係で、真夜中になることも多かった。松山の中には墓や火葬場があったり、牛や馬の死んだつを埋めたりしよったもんじゃから恐ろしかったが、背に腹はかえられんから、夜でん出かけよったつよね。

ところがある年のことじゃった。丁度大晦日の晩は大潮になるので潮がうんとひき、「かき」採りにはもってこいじゃから、

近所のもんと四、

五人連立って「か

き」採りに出かけ

たつよね。

そした

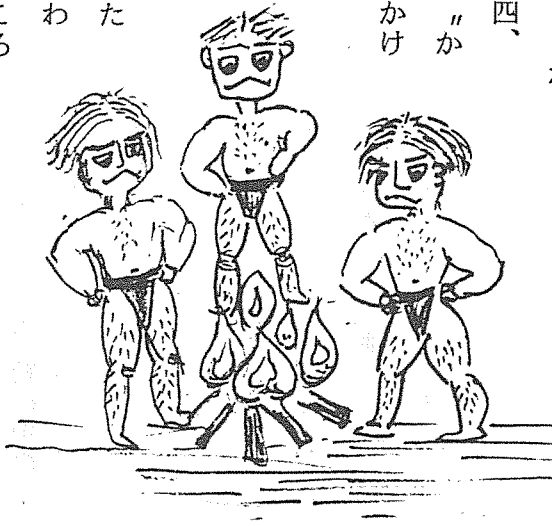
ら今の

磯亭のと

ころまでいった

ら、波打ちぎわ

の上の丘のところ



で、大きな男が真裸で、燃えさかるたき火を囲んでおったが、わしどみや何も考えんでそこにどんどん歩いていってものを言おうと思て言いかけた途端に火も消え、側にいた男たちも消えちしもおらんごつなつた。そんなや「かき」採りのこつであんまり気にもならんかったが、帰ってそんな時のこつを思い出したら、ゾーッとしてガタふるたもんじゃった。それで外人人もそんげ言うもんで、次の朝そこに出かけていってたき火の跡をみたけど、火を燃やした跡なんかなかったつよね。人が燃やしたつならなんぶか燃え切れが残つちよるはずじゃが、ほんとに不思議なこつじゃった。

それからある晩のことじゃった。やっぱり「かき」採りで、堀の内の浜に行った時のことじゃった。こん時や先に一人でいっちゃったが、一寸暗めじゃったもんで「かき」が目にかからんじゃった。そいで「もちよつと明けといっちゃけん」と思った。と、そんな時二、三十米先のほうが急に明るなつたつよね。よう見てみると大きな火の玉が、ゆらゆらゆれながら輝いちゃつとよね。そいで、わしが居る所まじ明るなつたもんで「かき」がはつきり

見えてきたつよ。わしゃあ、もう一生懸命になって「かき」を採ったもんよ。

ところが、おかの方で五、六人の仲間が口をそろえち、「早よ、あがちこんのー、でっじゃが」

とおらぶもんで、わしゃ何じやろかとびっくりしながら、あたふたと皆がおっとこに走ったつよね。そしたらその火の玉が追っかけちくつとよね。わしゃあもうおじなって、やつとこつと走って皆のどこまでいったもんじやった。火の玉はわしどんがそばまじ来ると、今度は頭の上をぐるぐる回りはじめたつよ。皆なはもう生きた心地もせんかった。それでも履いちよった草履をぬいで頭の上にのせたつよね。そしたらわしどんが気がついた時にゃ、火の玉はもう消えちよったつよね。今考えてん、身震いするごたる。不思議なことあったもんよ。

こんなこともあった。「かき」が沢山採れたもんで、四、五人連れで妻に歩いて売りにいって帰り道のことじやった。日はもう西の山に沈んで一寸うす暗かったが、突然高鍋の方が真赤になり、空まで赤く染まったつよね。

わしたちや、

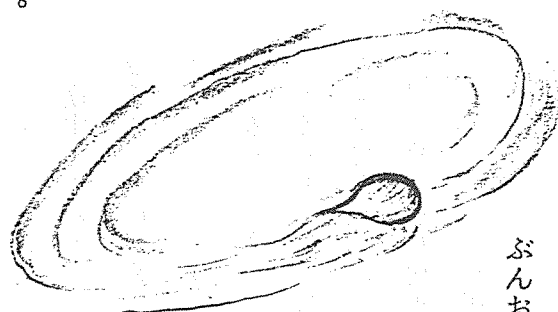
「高鍋が火事じゃ」「早よ帰ち見らんといかん」

などいいながら、急ぎ足で息を切らして帰ちみると、火事などどこもなかった。全く狐にだまされたごだった。

そんな頃は、こんげな不思議なことが次から次にあったもんよ。今ん若けもんなうそんごつあるじゃろ。わし

だ若け頃かりでー

ぶんおじ



目におうたもん

じゃ。何ぼ世の中が進んでん得体の知れんこつはあつとよね。おー、おじおじ。

昔のお里廻り

高鍋郷土教育資料集より

お里廻りというのは、木城にある比木神社の神様が高鍋へ御神幸になり、それからここかしこの村落をお廻りになるのである。

先ず比木を出られて、川田神社でしばらくお休みになる。お付きの神官は皆、鈴つけ馬に乗り警護を従えしゅくしゅくと進まれる。警護の方々は剣菱のご紋のついた羽織り様のものを着け、六尺棒を持って「みこし」の前後左右につかれていた。川田神社を出られると高月の愛宕神社の下で、神官等は皆馬から降りて、島田の御門から笛や太鼓の音楽入りで新小路の家老の宅においでになる。ここで御供物を奉りお神樂があつて昼のご飯をご馳走になり、次は下町の永友家に向かわれる。やはり鳴り物入りで皆歩いて行かれる。

永友家では家族は皆留守である。神様の滞在中、永友家の人は皆外出して神様をお迎えした。永友家と中鶴の谷口家より御供物を奉り、お神樂がある。一通り終わ

って次はお仮屋（現在の役場の所）に向かわれる。

お仮屋で夕飯を済まされると、次に弁財天（旧黒谷坂の途中）にお出になり、

真夜中一時頃に宮田へ向かわれる。そのおりは高張り提灯が先頭で、後につづく行列の人波は大変なもので数百米にも及んだ。神様が筏橋付近にお出でになる頃、宮田のひとびとが松明でお迎えにあがった。その模様はまるで火の海・人の波を見るようで、実に壮観であつた。

宮田大明神にお着きになると、ここでもお供え物があがり、お神樂を奉納して賑やかなお祭りの



行事が繰りひろげられる。それで神官の方々は、三時頃
ようやく床につかれたということである。

明くる日、宮田をお立ちになった神様は、太平寺の野
村家にお出でになり、ここでお昼ご飯をすまされご出発
となる。太平寺から新小路を通られ筏に入り、前の郵便
局（下町）の角から町を北の方に向かわれ、小丸街道を
経て坂本にお出でになる。この間は神官は皆、鈴付け馬
にまたがり大した賑わいであったという。

坂本から切原、切原から祝伺名（ホリミョウ）にいか
れ、ここで一泊なさった後、木城に入られ、高城、岩淵
とお立ち寄りになられお宮入りとなられるのである。

又、このお祭りは毎年、旧の九月申の日から戌の日ま
で三日間行われましたので、このお祭りのことを申戌の
祭りと言ったものだそうだ。



谷坂の怪

家床 永友 千秋 七十二歳

昭和三十五年ごろのことでした。

「先生、谷坂は夕方になるとおじもんが出るげなよ。お墓の下を通る時は頭の上から土や砂がばらばら落ちてくるげなよ」

とのこと。関係の女生徒を呼んで聞いてみた。

「この前、私たちが課外がすんで帰るときは、もう薄暗くなっていました。友だちが一人少しおくれて来よったので、待ちながらそろそろ歩いていたのです。お墓の下を通る時、頭の上から土や砂がばらばら落ちてくるので、ギョッとなって顔を見合わせ、ひょいと後から来る友だちを見ると、友だちは髪の毛が針金のようになって、じやーんと上向きに逆立ちしているではありませんか。私たちは『キャーッ』といって坂を走って逃げ、少し先の曲り角でまっていました。友だちは泣き泣き追いついて来ました。その時は髪の毛はいつもの通りのおかっぱでした。」



『おじかったね、あんたの髪の毛はじゃーんと逆立ちしちゃったがね』

といいながら、走って帰りました」

「先生、課外が遅くまでであると、谷坂へんなもう暗くなるとよ」

よく聞いてみると、これは問題でした。先生方と相談して、この対策を進めました。

この頃富田小学校でも、追分に帰る女生徒が、何回も恐ろしい目にあつたのだそう。

夏の夜の不思議

馬場原 後藤ミドリ 六十八歳

私が幼い頃、実際にこの目でとらえ、経験しました異様な出来ごとを、思い出しながら書きつづてみます。

私は大正七年、下屋敷の農家に生まれました。この話は昭和の初めごろで、私が八歳か、九歳ごろのことです。

その年の夏は大変な干ばつで、長い間、雨一つ降らないばかりか、くる日もくる日もかんかん照りが続きました。丁度田植えどきでしたが、水不足で、どこの農家も田植えが出来ず困り果てていました。高鍋の人々は水を求めて、田んぼのあちらこちらに井戸を掘るやら、雨ごいの祈りをするやらで、その年の農民の苦しみは大変なものでした。

そんな日のある晩の九時ごろ、私ども家族は、暑くて眠れないままに涼を求めて庭先の涼み台に腰をおろし、にぎやかに話し合っていました。と突然に、現在の南九大の方の山が急にぱーっと明るくなったかと思うと、なんとおぼん位の大ききさでオレンジ色の火の玉が現われた

のです。

私ども家族は一樣にびっくりして、声

一つ出すことが出来ません。

私どもはまばたきもしない

いで、じっと見つめてい

ますと、その火の玉は

静かに動き始めました

が、やがて、ややスピ

ードを上げながら山の

中腹を西の方へと飛ん

でいきはじめました。

それから当時、高鍋の

シンボルだった二本松

のところまで飛んで行き、

高い松の枝に止まると、

火事にでもなる様な真赤な

火の粉を散らすのです。や

がて、又もや動きはじめ、西

の方へスーッ、スーッと飛んで



いくのです。

あっけにとられた私どもは

なおも火の玉を追いつづけて

いますと、神祭野の坂の上を

西へ飛び、人家近くの杉林に

ひっかかり、又もや火の粉を

まきちらして、こんどは雲雀

山の方へと飛んでいったので

す。

この火の玉を見た人はほか

にもたくさんいたもようで、

たちまちの中に大評判になり、

町中をさわがせました。

ところが、火の玉が飛んだ

同じ時刻に、こっそりと自分

の田んぼだけに水を引き入れ

ていた男がいて、火の玉はこ

の男に近づいたかと思うと、頭すれす

れにぐるぐると回りつづけました。男はびっくり仰

天し、ぬけた腰をガクガクさせながら、やっとの思いで家に逃げ帰ったということです。帰って帽子をとって見ますと、帽子が真黒にこげていたのです。男は二度びっくりしちぢみあがりました。

男は、ひきょうなふるまいをはじて、二度とこの様なことはしなかったということです。

又、その火の玉は雲雀山地区をぐるりと一周し、途中木の枝にひっかかり火の粉を飛び散らしながら、熊野神社、ごまさんの森の中へと消えていったそうです。

昔は、毎年九月一日の「ごまさん」のお祭りには薪を組み火をつけてお祈りがあり、やがて燃えきった薪は炭火となりますが、その炭火をかきひろげて、その上をはだして渡る神事がありました。現在も行われているのでしょうか。

雨水をこい願う農民の祈りが火の神様をさそい出したのでしょうか？ よこしまなことをしている人へのいましめもあったのでしょうか。ほんとにびっくりした火の玉でした。

それから数日後、恵みの雨がたくさん降り、水に難儀

していた農家もようやく田植えをすることが出来ました。六十年も以前の出来ごとですが、まだ現在でも私の脳裏にやきついてはなれず、昨日のことの様に思い出されます。

少女のころの恐れ、恐れ、思い出話の一つです。

鳴野の千石船物語

鳴野 矢野善四郎 九十四歳

鳴野 森 栄 八十八歳

小丸川の流れば、明治・大正時代には水量も豊富で飲料水にも使用していた。川口は深く、船の出入りには大変都合がよかった。小丸川の川口に居住している人々は、その良港を利用し、生活のために千石船・漁船を建造したり、船で輸送にあてる等して生業に励んだのである。

鳴野地区で千石船の所有者は、次の方々であった。

岩下源吉（宝国丸） 矢野忠治郎（稲荷丸）

鈴木要之助（大寿丸） 矢野文造 柄本寅吉

橋本善吉（旭丸） 柄本末太郎 木下藤吉

森 藤蔵 山本寅治

千石船は大小あったが、遠くは大阪港までそれぞれの目的港へ荷物を輸送していたのである。船には三、四人が乗り組み、それぞれの役割をもって完全に運行していたが、大阪方面にいく船は、往復三十日以上も日数がかかったのである。積荷の品物は、米・砂糖・雑穀・塩・

木材・木炭・その他生活必需品で、集積場所は「カン

バ」といって、川口

と水神様の付近の二

か所にあった。

荷おろしの品物は

肥料・諸原料・石灰

・ホシカ・石材・み

かん・その他生

活必需品であ

った。積

荷・荷お

ろしの品

物は、馬

（くらの

利用）・

車力・手車・

人の肩だったが、後に

馬車が利用された。

